

捧げる 献花はオリーブ あとがきに代えて

佐谷和彦

佐谷画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今年二〇〇〇年第二〇回を迎える。今回は中川幸夫展 献花 オリーブで、資生堂と共催である。

展示作品はオリーブの樹(根付き四本)と写真によるインスタレーションである。このオリーブの木は作家自身が香川県小豆郡土庄町豊島てしまの東洋オリーブ(株)所有のオリーブ園に行き、自ら選んだものである。このことについては後述する。会場入口には中川幸夫の書「献」、「花」の二枚のパネルが展示される。ただいま私の荻窪の画廊でこの作品をながめているが、力のこもった見事な作品である。中川さんの写真も師土門拳直伝の腕前で年季が入っている。コワイ存在である。カタログについては、展覧会オープン前に完成しているのが常識であるが、今回は作品がオープン直前に完成し、その写真をカタログに収録するため、七月一日頃出来上がることになる。

カタログのテキストは酒井忠康さんから「花は花で生ける―中川幸夫私論」をご寄稿いただいた。深謝申し上げる。

カタログの構成はテキストを含め次のとおりである。

① 展示作品の写真。

② 瀧口修造と中川幸夫の関係を示すものとして、瀧口修造「狂花思案抄―中川幸夫氏に」(一九七七年)、中川幸夫作「花坊主」(一九七三年)の写真。中川幸夫は作品集のテキストを是非とも瀧口修造に書いてもらいたい一心で懇請を重ねた。しかし瀧口は、いけばなについては書かないと断言し、その立場は不動であった。そこで、中川は自分の生き方を賭けた自信作「花坊主」を直接瀧口に示した。瀧口はいたく驚き「花の血か」とつぶやき、了承、半年後「狂花思案抄」が生まれたのである。

③ 今は無き瀧口修造邸のオリーブに関する資料として、NOAH'S OLIVES、オリーブのびん詰、オリーブの枝、「オリーブ樹下の瀧口修造」写真高梨豊。

④ 瀧口修造の絵画作品、デカルコマニー、バート・ドローイング。

⑤ 略歴、主な展覧会、作品集。以上を収録している。

さて今回の中川幸夫の作品であるが、ただいまこの文章を書いている段階では、四本の根付きオリブと写真が素材として使われるであろうということしか言えない。どのようなインスタレーションの作品が実現するか、作家は目下思案中である。生きているオリブを使用すること、インスタレーションという手法であることから、極めて即興的、パフォーマンス的なものになることは明らかである。作るその時、ギリギリのところで作家がパッとひらめくものをつかんで、作品は生まれる。何が生まれるか、それがわれわれをワクワクさせるのである。

ここで中川幸夫さん自身の言葉をお届けしたい。アサヒグラフ一九九九年三月一二日号「中川幸夫「花」の現在」で記者の質問に答えた中川さんの言葉のなかから選んだ。

……(池坊を脱退して)一人になり、自分に何ができるかを考えたときに、中野重治の「赤まま」の詩があっただです。……希望ですね。

……
胸先を突き上げて来るぎりぎりのところを歌え

(中野重治「歌」)

……弟子入りしたいっていう人も大勢来たけれど、花なんて教えられるものじゃないですよ。花っていうものは、「型」は教えられても「血」は教えられない。家元制の組織のアタマになってしまうと自分の発展がなくなる。すると手も慣れのほうにいつて新手のものにいかない。流儀をはずれて自分の頭で考えて、自分の手でものをすすめるということが大事です。そうすれば見えなかったものが見えてくる。

花はきれいきれいでは見えないものがある。一枚めくれば何かが出てくるものもあるし、何かを足すと相反するものが出てきたりもする。表現方法は無尽蔵ですよ。ぼくは覆して覆してやっているばかりで……

以上の言葉のなかで私が気になったのは「型」は教えられても「血」は教えられない、という部分である。「血」とは何か？、その意味するところは何か？血は生きているものの証である。花にも血がある。さまざまな色の血がある。さらに進んで血はそれぞれの生き方に転ずる。その生き方は自分で見つけるものである。自分で決めるものだ。教えられるものではない。これが私の解釈であり、このように理解している。

中川幸夫のしごとについては多くの方が評価しておられる。なかでも私が強いインパクトを受けた文章は小説家の柳美里さんの数編のエッセーおよび美術評論家南島宏さんの「中川幸夫を超えて―二十一世紀のいけばな」(日本女性新聞二〇〇〇年一月一日号)である。特に後者は久し振りにわが意を得たと感じた熱っぽく、さわやかな好論考である。(内容は省略)

次に中川さんと小豆島に旅行したことを記しておきたい。同行者は資生堂の西村彰さんと私である。最終的にオリブで作品を作ると決まった際、オリブの樹の実物を展示場に持ち込むことになった。オリブといえば、小豆島である。そこで小豆島行きとなった。

五月八日、午後四時前に土庄港に着いた。東洋オリーブ(株)の責任者高橋、柴田のお二人に出迎えていただき、便宜をはかっていただいたが、それは会社のオーナーである南御夫妻と中川さんとが親しい間柄であることによるものである。それはすぐさまオリーブ公園を見学するなど、極めて効率的な行動となって現れた。

翌朝、目を醒まして窓を明けると、なんと一寸先も見えない濃霧である。果して隣の島の豊島てしまに行けるのか、と一瞬ドキリとした。幸い一時間遅れで一〇時半に豊島に着きこと無きを得、オリーブ園をご案内いただいた。

山の斜面にあるオリーブの林を上下左右、休み休みではあるが三時間ばかり歩いてオリーブの樹を探し求めた。中川さんは今年八二歳であるが、お元氣である。鍛え方が私とは違うのである。

中川さんは端整なすがたの樹よりも、動きやゆがみのある個性的なすがたの樹を、展示会場を考慮して選ばれた。この四本の根付きオリーブの樹は六月二十六日朝、東京銀座のザ・ギンザ・アートスペースの会場へ四トントラックで運ばれる予定である。待ち構えているテレビ、マガジンのカメラの放列による洗礼を受けることになるであろう。

瀧口修造邸のオリーブについては「ノアのオリーブ」のびん詰、その口上のあかさつ文「舌代」に集約されているが、そのびん詰めを受けとった側にはさまざまな想いがある。

中川幸夫さんは今も身近にその小びんを置いておられる。驚いたことに小びん

のなかにあるオリーブの実半分ばかりそのまま残されているのである。これは中川さんらしい瀧口さんへの想いの表現といえよう。

池田龍雄さんは『おりいぶ物語―瀧口修造氏との私的時間一九二八―一九七九』(『コレクション瀧口修造別巻』みすず書房六一五―六二頁)なるエッセーのなかで「ASA R A T 橄欖環計画」の実現に至るまでの壮大な物語を展開しておられる。これは群を抜いている。ここまで行くと私は脱帽せざるを得ない。

私の想いは、瀧口修造先生のデスマスクに行き着く。逝去の日、一九七九年七月一日の夜の光景を綾子夫人は次のように記しておられる。

……頭上に七月の太陽がまだ燦々と照る道を、たった一週間の入院で悲しい帰宅をしました。懐かしいわが書斎のすべての物を残して逝きました―何処へ? 書斎に安置されたお棺の上には、庭のオリーブの一枝を捧げ、その夜は、心をよせた三人の友と一輪の真紅の薔薇を供えて、ひっそりと夜を明かしました。……

(瀧口綾子・瀧口修造自筆年譜補遺)

心をよせた三人の友とは、福島秀子、榎本和子、漆原英子。あの懐しい書斎の空間に、瀧口修造の棺、綾子夫人のそばの棺の上には、オリーブ一枝と一輪の真紅の薔薇。二一年前の現実の一シーンである。

ここで、かねて進行中の慶応義塾大学の「アーカイヴ瀧口修造」のプロジェクト

が瀧口修造逝去二一年後、綾子夫人逝去二年後の、この三月、正式に発足することになったことをお知らせしたのである。責任者の前田富士男さんは三田評論の四月号で「瀧口修造資料の寄贈とユニヴァーシティ・アーカイヴ」と題し、瀧口修造の関連資料が遺族の鈴木陽夫妻から寄贈されたこと、慶応義塾大学にとつては勿論であるが、この国の文化の歴史にとつても重要なステップになると記しておられる。

瀧口修造は慶応義塾大学が母校であり、先輩に西脇順三郎(詩人)、同僚に佐藤朔(学長・仏文学)の両先生がおられる。瀧口修造のしごとは、詩、美術評論、絵画の三領域にわたるので、総合大学がその受け皿としてもっともふさわしい。なかでも慶応は人的、財政的にその基盤は充実しており、アーカイヴの手法についても先端的で意欲的である。さらに瀧口修造のしごとは慶応で始まり、東京を基盤に充実、展開したことは周知のところである。グローバルな視点から瀧口修造を研究し、内外にその情報成果を発信する拠点として慶応は最適の選択であると同時に、このアーカイヴ瀧口修造のプロジェクトはこの国の芸術文化のレベルアップに大き

く寄与するものであると私は思っている。将来を期待するものである。

最後に、この記念すべき第二〇回のオマージュ瀧口修造展を中川幸夫さんで開催できたことをうれしく思っている。開催までの過程でさまざまなことを中川さんから学んだ。

中川さんのしごとは彼自身の言葉によって示唆されるように転換期にあるわが国の芸術文化の状況のなかで、われわれの進むべき方向を指し示すものであると私は感じている。益々のご自愛ご健勝を祈るものであります。

このたびは資生堂と共催でこの展覧会が実現できたことをありがたく思っている。私のしごとをご理解いただいた福原義春会長、企業文化部スタッフの皆さんに深く謝申し上げます。

さらにこの展覧会開催に当たって東洋オリーブ(株)、その他多くの方々のご協力、ご支援をいただいたことに感謝し、結びの言葉といたします。

二〇〇〇年六月一日